

教師にとって生徒にとって教科書・教材とは

杉本 豊久（成城大学助教授）



「不慣れな外国語を使っている最中は、その外国語を使うのが難しいだけでなく、思考力も一時的に低下する」これは、ある学会での発表内容の一部です。発表者はこの現象を「外国語効果」と呼びました。英語の授業中に、まるで「おじぎ草」のように下を向いて反応しない生徒たちと接したことがある先生方ならば、この「外国語効果」の存在を疑わないでしょう。ある大会社の元会長さんも、「私は重要な国際会議では決して英語を使いません。優秀な通訳を雇います。そうしないと会議中に(思考力が低下して)自分の考えがまとまらず、意図したことをうまく表現できないことがあるからです」ということを述べられています。また、英国滞在中に私のパートナーが自動車の運転免許を取ろうとしたときのこと。路上で運転の練習をしながら、隣にいるインストラクターの指示や解説はかろうじてわかるものの、運転と英語で頭がパニック状態になり、英語の返答ができなくて困ったと言っていました。外国語を学んだことのある人ならば、みなさんこれに似た体験をされたことがあるでしょう。この発表者も大学時代に合衆国へ留学し、英語のネイティブ・スピーカーたちとのコミュニケーションにおいてみじめな思いをしたことが研究の発端となっていたようです。

さて、言語活動というのは、言語処理(音声や統語の解析、文の生成や発声など)と思考(相手の発言内容の分析や意図の推測、自分の発言内容の案出や点検など)とを同時に行う活動といえます。母語話者はこれを比較的上手にこなせるのですが、外国語学習者はこのふたつの活動が干渉し合い、「外国語効果」に悩まされます。つまり、外国語の言語処理能力が未熟なために、そちらに振りまわされて思考活動がおろそかになるというわけです。そのような状態にある学習者、つまり生徒たちにとって望ましい授業を実現させるための教科書・教材とはどんなものでしょうか。言語処理、思考というふたつの活動のどちらかに手を加える必要があります。言語処理をしやすくするためには、たとえば「文型・文法や新語数の精選」をして「基礎・基本の徹底」を図るという方法があります。また、生徒の視点に立った(身近な)場面設定を心がけ、現実味のあるやさしい言語活動を教材に盛り込むことにより、思考力の向上を目指すことも可能でしょう。一方、思考活動を活性化するための努力も必要です。環境・戦争と平和・人権(共生)など中学生の知的レベルに合った題材内容を厳選すること。彼らに感動や驚き、喜びや悲しみを体験させてくれるような題材を教材に盛り込み、彼らの思考力を大いに刺激する。これらがまさに「外国語効果」を克服する道につながるのです。